

氏名	長友 瑞絵
ヨミガナ	ナガトモ ミズエ
学位の種類	博士（美術）
学位記番号	博美第521号
学位授与年月日	平成29年3月27日
学位論文等題目	〈論文〉 『フィシオログス』写本挿絵の研究 —挿絵サイクルの伝播をめぐって— 〈作品〉 〈演奏〉

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	田辺幹之助
(論文第1副査)			( )	
(作品第1副査)			( )	
(副査)	東京藝術大学	教授	(美術学部)	越川 倫明
(副査)	東京藝術大学	名誉教授	( )	越 宏一
(副査)	東京藝術大学	准教授	(美術学部)	佐藤 直樹
(副査)			( )	
(副査)			( )	
(副査)			( )	
(副査)			( )	

(論文内容の要旨)

『フィシオログス』(ギリシア語で「博物学者」の意味)とは、2世紀頃アレキサンドリアにおいて成立したキリスト教的博物譚である。ギリシア語のオリジナルテキストは各国語に翻訳されたが、特にラテン語テキストは多大な人気を博し、ヨーロッパ全体に流布をみた。また12世紀末にはここから『ベスティアリウム(動物寓意集)』が派生し、イングランドを中心に、ゴシック期にかけて多くの挿絵入り写本が作られた。

主要先行研究としては、マックロック(McCulloch 1962)やクラーク(Clark 2006)による総合的研究があるが、『フィシオログス』や、初期『ベスティアリウム』写本に関する研究は、いまだに等閑な状況にある。そこで博士論文では、最古のラテン語『フィシオログス』写本と初期『ベスティアリウム』写本を主たる研究対象とし、個々の写本の分析を通じて、それらの挿絵サイクルの相関関係を提示することを目的とした。特に後代、ラテン語『ベスティアリウム』写本の系譜において主流を形成することとなる、Bヴァージョン系統写本の挿絵サイクルの成立プロセス解明を念頭におき考察を行った。

第一章では、ラテン語テキスト各ヴァージョンの系譜および先行研究を整理し、本論における課題を提示した。その結果、個々の写本の挿絵サイクルの特質について体系的に見通す考察はなされておらず、コンテンツ・リストや挿絵表といった資料を作成・使用しながら、考察を進めることが課題として浮かび上がった。

第二章では、最古のラテン語『フィシオログス』写本と初期『ベスティアリウム』写本にあたる写本群の個別分析を行った。具体的には最古の挿絵入りラテン語写本である以下の3写本を取り上げ、様式と図像、および挿絵サイクルについて考察した。: Bern, Burgerbibliothek, Cod. 318 (ca. 830) (ベルン本) / Brussels, Bibliothèque royale de Belgique, ms. 10066-77 (10c-11c) / Oxford, Bodleian Library, MS. Laud Misc. 247 (ca. 1110-1130). 考察を通じ、これらの写本の造形的特色や挿絵サイクルは単一

のプロトタイプに遡るものではなく、おそらく成立時期の異なる幾つかの挿絵サイクルが、初期中世時代に継承されていたことに起因すると推定した。

第三章においては、『フィシオログス』におけるチャプター・オーダーの問題を論じた。筆者はベルン本のオーダーと、比較作例としてセカンド・ファミリーの『ベスティアリウム』の基準作、ブリティッシュ・ライブラリーの写本 (MS. Add. 11283) を分析し、ベルン本におけるオーダーは恣意的なものではなく、Bヴァージョンと同様、共通テーマをもつ主題ごとにまとめられ配列されていることを明らかにした。ベルン本にはBヴァージョンで認められたような、組織的構造こそ見られないものの、オーダーが意識的に構築されたものであることが推測された。それに対しAdd. 11283写本のオーダー構成は、セビーリヤのイシドルスによる百科全書『語源論』(7世紀)に依拠しつつも、王を頂点とする同時代の封建社会のヒエラルキーを反映し、オーダーを形式的だけでなく質的にも大きく変化させた構成となっていることが浮彫りとなった。

第四章では、本来挿絵がなかったと推定されるBヴァージョン系統の写本の挿絵サイクル成立のプロセスについて、より詳しく説明すべく、B-Isヴァージョンの写本群を中心に持ち上げ考察した。B-Is写本群のテキストは単一のものではなく、2系統が存在し伝播していたことは近年指摘されていたが、本章での分析によって、挿絵についても二つの挿絵サイクルの存在が明らかとなり、それはテキストの2系統の系譜とは一致していないことが確認された。すなわちB-Isに分類されるケンブリッジ、コーパス・クリステイ・カレッジのMS. 22写本を見ると、テキストはブリティッシュ・ライブラリーのStowe1067写本系統であるのに対し、挿絵サイクルは同写本のものとは共通性はなく、複数場面を含むものであり、挿絵とテキストの系譜の乖離が起こっていた。

第五章では、挿絵とテキストの系譜それぞれの独立性に関し、もう一つの証左として、これまで注目されていなかったDCヴァージョンの写本群から《ミルシュタットのフィシオログス》(Klagenfurt, Kärntner Landesarchiv, 6/19, 12c) を考察した。ミルシュタット本とベルン本における図像の共通性から、挿絵の系譜が必ずしもテキストの系譜と一致するものではなかったことを示唆する可能性を指摘した。

以上の考察を通じて、『フィシオログス』および初期『ベスティアリウム』の挿絵サイクルを考察し、実際に確認される諸相とその展開を明らかにした。このように明らかにされた、それぞれ特質を備えた“神秘の動物学”のメカニズムは、両者を中世キリスト教美術における動物シンボリズムの単なる手引書と見なす先行研究の見解を刷新するものである。

#### (論文審査結果の要旨)

申請者長友瑞絵さんは、本学の越宏一名誉教授のもとで卒業・修士論文を、さらに私の研究室で博士論文を執筆した。論文の対象は古代末期に成立した『フィシオログス』写本、および12世紀末にこの写本から派生した『ベスティアリウム (動物寓意集)』写本である。これらの動物図像は中世を通じて多数の写本が制作されるのみならず、他の絵画や工芸、彫刻の領域における動物の描写に対する手本となり、中世に継承された古代図像の代表的な例として非常に重要であることが知られているものの、テキスト研究が先行し、美術史領域における図像の伝搬と変容のプロセスに関して十分な考察が行われているとは言い難い。本論文はそのような研究状況を踏まえ、写本挿絵の体系的な比較と分析を通じて、この『フィシオログス』/『ベスティアリウム』写本群における動物図像の継承と発展の様相に考察を加えるものである。中世の写本挿絵にはしばしば、テキストの伝搬とは必ずしも一致しない図像の自律的な系譜が形成されるが、本論文は動物図像を例として中世における古代図像の継承と言う大きな課題に取り組む研究となっている。

論文は5つの章によって構成されている。第1章では先行研究の整理と問題提議に充てられている。そこで申請者はテキスト研究に即して形成された従来の『フィシオログス』/『ベスティアリウム』写本群の系統樹を提示すると同時に、写本の挿絵サイクルの伝搬がテキストの伝搬と必ずしも一致せず、図像の伝搬にはテキストとは異なる法則が作用していることを指摘する。そこで申請者は、美術史領域では図像の伝搬に即して独自の系統が形成されるべきことを提議している。

第2章では、この問題提議に即して初期の挿絵入り『フィシオログス』写本である通称「ベルン本」(ベルン、市立図書館、Cod. 318)、「ブリュッセル本」(ブリュッセル、王立図書館、ms. 10066-77)、「オックスフォード本」(オックスフォード、ボードリアン図書館、MS. Laud Misc. 247)を取り上げ、図像サイクルを比較・分析することによって、この3つの写本がそれぞれ異なる写本サイクルを手本として制作されたことを指摘し、テキストに即した系譜が共通の源泉から派生してゆくものに対して、これらの初期の写本サイクルは、すでに複数の図像源泉によって制作されていることを明らかにしている。

第3章ではさらに写本の構成を観察することで、『フィシログス』写本に新たなテキストが加えられ『ベスティアリウム』サイクルが生まれる際の、動物写本の性格の変化について考察を行っている。申請者はそこに、12世紀の頃に社会的な要請を反映した修道院の知的文化の変化を読み取っている。

第4章では、B-Isバージョンと呼ばれる『ベスティアリウム』写本の主要な系統に属する写本群を取り上げ、同じグループ内における写本群の図像サイクルの比較を行っている。申請者はこの比較を通じて、テキスト分析において同じグループにまとめられている写本群でも、図像サイクルに関しては異なる手本に由来する異なる性格のものが混在していることを指摘し、図像分析を通じて、従来の系統樹とは異なる系譜を提議している。

さらに第5章ではDCバージョンと呼ばれる『ベスティアリウム』写本の傍系に属する写本群に着目し、中でも通称「ミルシュタット本」(クラーゲンフルト、ケルンテン古文書館6/19, 12c)を取り上げて、図像分析を行っている。この分析を通じて同写本の挿絵サイクルが、テキストからするなら全く異なる系譜に属する「ベルン本」の図像伝統に属していることが明らかにされた。申請者はこれらの図像分析をもとにして『フィシオログス』-『ベスティアリウム』写本群について、テキスト分析によるものとは異なる系譜図を提案し、結論としている。

中世を通じて膨大な写本が制作された動物図像のサイクルを主題として、従来のテキスト分析によって提示されていた系統樹とは異なる、美術史領域における独自の系譜を提示しえたことは、本論文の大きな成果である。素材として取り上げられた写本群の整理と図像分析の洗練の点ではさらに一考の余地を残すものの、申請者の試みた基礎的な作業は、中世における古代図像の伝搬のひとつの重要な事例の提示として、今後の研究にも大きな意味を持つと評価されよう。よって本論文は学位請求論文としての要件を満たすものと認められる。